
3. 両生爬虫類

1 石川県の両生類相

石川県において記録された両生類は、有尾目 3 科 4 属 7 種、無尾目 4 科 5 属 13 種 1 亜種である（宮崎 1996, 2008）。隣県と比較すれば、本県には富山県でみられるハクバサンショウウオ、福井県でみられるダルマガエルが生息していない。

県内の両生類相をみると有尾類では、加賀地方南部にアベサンショウウオ（宮崎 2008）、能登地方にホクリクサンショウウオ（宮崎・竹田 2000）が生息している。両種は里山のサンショウウオで、産卵場が民家に近い丘陵地や山麓部にあり、人間の生活する場と重複しているため都市化や開発によって消滅する危険性が高い。特にアベサンショウウオはホクリクサンショウウオに比べてはるかに個体数が少なく、産卵場の攪乱もあって危機的な状況にある。クロサンショウウオは能登から加賀まで広くみられ、垂直分布も海岸付近から白山山系に及んでいる。ヒダサンショウウオは加賀・能登地方の山地や丘陵地に生息している。しかし邑知瀉地溝帯以北では分布域が限られており、個体数も少ない。ハコネサンショウウオも同じく山地帯でみられ、一般にヒダサンショウウオより高所に分布している。オオサンショウウオはこれまで山中町や小松市などで捕獲されているが自然分布ではなく、他県から移入されたものである。アカライモリは水田や池などでみられる。

無尾類では、ヒキガエル類はアズマヒキガエルが能登および加賀地方に分布している。金沢城跡にいたニホンヒキガエルは、1988 年を最後にみられなくなった。また加賀地方の河川の上流域にはナガレヒキガエルが生息している。

ニホンアマガエルは低地では県下全域でごくふつうにみることができる。

ニホンアカガエル、タゴガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ツチガエルは能登から加賀まで分布している。ニホンアカガエル、トノサマガエル、ツチガエルは平地や丘陵地の水田、池などに多い。ヤマアカガエルは平地から山地帯まで生息分布が広い。タゴガエルは山地に広く生息し、高所では白山の標高 2,300m でみられている。加賀地方の山地溪流の上流部ではナガレタゴガエルが分布しているが、個体数は比較的少ない。北アメリカから移入されたウシガエル（本県には 1925 年に木場瀉へ入ったのが最初である）は加賀から能登まで分布を拡げている。

モリアオガエルは県内に広く生息しており、海岸近くの水田から標高 2,000m 以上の高地でもみられる。シュレーゲルアオガエル、カジカガエルも県内全域に分布し、シュレーゲルアオガエルは平地や丘陵地に、カジカガエルは河川の上・中流域に多い。

2 石川県の爬虫類相

石川県では、カメ目 4 科 9 属 9 種、有鱗目 6 科 10 属 12 種が記録されている（松村 1996；松村・宮崎 1996；松村・山下 1996；徳本 1996）。本州産爬虫類のほとんどが石川県にも生息しており、分布していないのはミナミイシガメとタワヤモリの 2 種だけである。

県内の爬虫類相はウミガメ類では、アオウミガメは春から夏に回遊してくる傾向がみられ、タイマイは秋から冬に幼体の死後漂着が多い。石川県沿岸への回遊が最も多いのはアカウミガメで、現在までに 4 例の産卵記録（このうち孵化したのは 2 例）と 2 例の上陸記録がある。能登半島は日本海側における産卵孵化の北限地であるが、いまでは上陸して産卵できるような海岸がきわめて少なくなっている。ヒメウミガメは冬季に 3 例の死後漂着がある。オサガメは秋から冬に回遊がみられるが、冬は死後漂着が多い。

クサガメは瀉や河川河口部を中心に生息している。ニホンイシガメは山間部の溜池や河川の上・中流域に多くみられる。溜池で越冬し、夏は周辺の水陸に住んでいる。移入種のミシシippアカミミガメ（原地は北アメリカ南部）は県内各所でみられる。今では個体数が在来種より多くなり、野外繁殖個体も多数

捕獲されている（野田 2004；野田・鎌田 2003, 2004）。ニホンスッポンは潟や河口付近、一部は溜池に生息している。

ニホンヤモリは民家がおもな生息場所に加賀・能登に広くみられる。ニホントカゲ、ニホンカナヘビは平地から山地まで分布している。ニホントカゲは日当たりのよい場所に、ニホンカナヘビは草地に多い。

地中で活動し夜行性のタカチホヘビは、いまのところ奥能登からは発見されていない。シロマダラも夜行性で日中は石の間などに隠れており、県内の記録はあまり多くない。シマヘビ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、ヤマカガシは広く分布しており、ふつうにみられる。ジムグリとヤマカガシは白山の標高 2,300m 以上の高山帯でも記録されている。ニホンマムシは加賀から能登まで各地に生息し、セグロウミヘビは外洋性だが海流に乗ってときどき本県沿岸に現れる。

3 種の選定基準

絶滅のおそれのある種を選定するにあたっては、それぞれの種についてその現状と過去の状況をできるだけ定量的にとらえて、危険度を評価する必要がある。しかし石川県に生息する両生爬虫類では、個体数の変動を定量的に調べた報告はきわめて少ない。そのため選定にあたっては、下に記した(1)～(3)の基準によって6種および1地域個体群を選んだ(表1)。

表1 両生爬虫類選定種一覧

区分	両生類	種数	爬虫類	種数
絶滅	—	—	—	—
絶滅危惧Ⅰ類	アベサンショウウオ ホクリクサンショウウオ	2	—	—
絶滅危惧Ⅱ類	—	—	アカウミガメ	1
準絶滅危惧	ナガレタゴガエル	1	タカチホヘビ、シロマダラ	2
情報不足	—	—	—	—
地域個体群	邑知潟地溝帯以北の ヒダサンショウウオ	1	—	—
	計	4	計	3

今回の見直しにおいて前版(2000)と異なるのは、県内で生息が確認されたアベサンショウウオを絶滅危惧Ⅰ類に追加したこと、ナガレタゴガエルのカテゴリーを情報不足から準絶滅危惧に変更したこと、邑知潟地溝帯以北のヒダサンショウウオを絶滅のおそれのある地域個体群として新たに加えたことである。

- (1) 環境省(2006)の両生類レッドリストと爬虫類レッドリストに掲載されている種のうち、石川県に生息する種ならびに県内で繁殖する可能性のある種。

絶滅危惧Ⅰ類 アベサンショウウオ(環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠA類)

絶滅危惧Ⅰ類 ホクリクサンショウウオ(環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠB類)

絶滅危惧Ⅱ類 アカウミガメ(環境省版レッドリストでは絶滅危惧ⅠB類)

環境省版レッドリスト(2006)では、クロサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、アカハライモリは準絶滅危惧、ニホンイシガメ、ニホンスッポンは情報不足になっている。しかしこれら5種は本県における生息状況からみて、石川県のカテゴリーでは準絶滅危惧や情報不足とはしなかった。ただし邑知潟以北のヒダサンショウウオについては、(3)の地域個体群として挙げた。

- (2) 県内では個体数が少なく、しかも生息条件が悪化しているため生存が脅かされている種。

準絶滅危惧 ナガレタゴガエル

準絶滅危惧 タカチホヘビ

準絶滅危惧 シロマダラ

(3) 地域的に孤立しているため、絶滅のおそれが高い個体群。

地域個体群 邑知潟地溝帯以北のヒダサンショウウオ

卵と幼生の期間を水中で過ごす両生類は、環境の悪化に対して敏感に反応するので環境評価の指標として用いられている。また爬虫類は食物連鎖の上位の捕食者であり、爬虫類の生息状況はその地域における生物多様性を示す指標となっている。近年はこのような観点から、概して移動能力が低く生息環境の変化に弱い両生爬虫類を、生態系の健康状態を測るバロメーターとしてとらえることが多い。

(宮崎 光二)

新旧対応表

		前回						5
		絶滅 0	絶滅危惧Ⅰ類 1	絶滅危惧Ⅱ類 1	準絶滅危惧 2	情報不足 1	地域個体群 0	カテゴリー外 3
今 回	絶滅 0							
	絶滅危惧Ⅰ類 2		ホクリクサンショウウオ					アベサンショウウオ
	絶滅危惧Ⅱ類 1			アカウミガメ				
	準絶滅危惧 3				タカチホヘビ シロマダラ	ナガレタゴガエル		
	情報不足 0							
	地域個体群 2							邑知潟地溝帯以北の ヒダサンショウウオ
	カテゴリー外 0							